

街路樹

発問について考える

12月

～ペアレントトレーニングを参観して～
特別支援教育

授業力の向上を図る上で、発問の技術を磨くことは欠かせません。授業それぞれの段階における発問はどのようにあるべきでしょう。

<課題把握の場面> 発問例…○ ポイント…

- 「なぜ～なのでしょう」
- 「どうすれば～なのでしょう」
- ・ 既成概念を揺さぶる資料や事象提示と結びつけて行う。
- ・ 興味、関心、疑問や驚き、矛盾を感じさせる。
- ・ 時間短縮の意味でも、難解な発問は避ける。(易から難へ)



<課題追求の場面>

- 「これまでの学習との違いは何ですか」
- 「今までに学習したことで使えるようなことはありませんか」
- 「～と～を比べて考えてみるとどうですか」
- ・ 子どもの様子や反応を見て、タイミングよく発問する。
- ・ 既習事項と関連付けて発問し、解決に向けた取組みのイメージや具体的な方法に気づかせる。
- ・ 発問は精選し、できるだけ少ない発問で、子ども達の思考を広げたり、深めたりする。

<まとめの場面>

- 「今日の学習で分かったことは何ですか。(自分の言葉でまとめてみましょう)」
- 「もっと調べてみたいと思うことはありませんか」
- ・ 分かったことやできるようになったことを自覚させる。
- ・ 次時への学習意欲を喚起するような発問を意識する。

福島県教育委員会「日々の授業のブラッシュアップ」一部抜粋

発問次第で、授業の雰囲気は大きく変わります。使う言葉も大切ですが、伝え方(口調や表情、間etc...)によってもその効果が違ってきます。ぜひ、この機会に自分自身の発問を見直してみたいと思います。



先日、子育てサポートセンター(以下サポセン)でのペアレントトレーニング(以下PT)を参観してきました。サポセンは、小学校就学前までの子育てに関する保護者の様々な悩みに対応するために設置されている市の機関で、特別な支援を必要とする子どもたちやその保護者の支援に深く関わっています。

PTは、子育てに取り組む両親が、その役割を積極的に引き受けていくことができるよう、親と子どもを支援するために開発されたもので、軽度発達障害の子どもたちがかかえている特徴的な困難への具体的な対応の仕方について多くのアイデアが提案・実施されています。PTをとおして、“親-子ども”間の“よりよいやりとり”を具体的に学び、親としての自信を積み重ねていくことができます。

トレーニングには、2人のリーダー役(サポセン)と8人の保護者が参加していました。「してほしい行動」や「してほしくない行動」といった子どもの行動に焦点をあて、具体的にどのような対応ができるかを、ロールプレイをとおして共有と検討を重ねていました。朗らかな雰囲気の中で成功体験や失敗体験を積み重ねることで、保護者の対応技能向上と自信にもつながっていることがよく分かるトレーニングでした。

このPTについては本年度のいわき市総合教育センター研修の「幼児教育講座」の中で、福島大学の黒田先生よりPTの縮小版PP(ペアレントプログラム)についての講義を頂いています。

PTの技法・考え方には、保護者、児童生徒ばかりか、我々教員にも大きなメリットが潜在し、全ての児童生徒の健やかな成長のために実践してみる価値が十分にあると考えられます。機会があれば研修してみたいと思います。



～心で聴く～ 教育相談部

じっと座ってられない。感情をコントロールできない。順番を守れない。片付けられない。相手の気持ちがわからない。人前で話ができない。ほんの一部ですが、教育相談室を訪れる子どもたちの困り感です。

子どもたちは、「この気持ちをわかってほしい。気づいてほしい。」と受け止めてもらえる場と時間を心から求めているように感じています。不安を抱える子どもたちとともに、学校現場で日々奮闘している先生方のご苦労に敬意を表します。これからも、私たち大人の態度は敏感に子どもたちの心に反映することを忘れずに、心をつなげて、できることから取り組んでいけたらと考えています。

子どもたちの思いや気持ちにより添い、耳を傾けて「心で聴く」ことによって、表情だけでは見えなかった本音と出会うことができると信じています。「聴く力」が、子どもたちを健やかに育てていくことにつながっていることを肝に銘じたいものです。